海城中学・高等学校

なぜ医師をめざすのか、決意を固める「医学部小論文・面接講座」

海城中学・高等学校では、高校2年次の3学期から3年次の3学期まで、医学部志望者を対象とした「医学部小論文・面接講座」を実施しています。この講座の概要と、それを通してどのような意識の涵養をめざしているのかを、林敬先生（社会科担当）と石塚泰啓先生（理科担当）にお聞きしました。

「医師・患者関係」「地域医療」「先端医療」の3テーマを設定

――「医学部小論文・面接講座」を導入された経緯からお聞かせください。

林　海城では、1992年度より、中1から中3まで、社会科総合学習として、週2時間を当てる「社会Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」という独自の授業科目を導入しました。生徒一人ひとりが、興味を持ったテーマについて、自ら文献調査、取材・フィールドワークなどを行い、レポートにまとめる授業です。中3の2学期には卒業論文を仕上げることになります。卒業論文のテーマに、10年ほど前から、「終末期医療のあり方」、「小児がんの告知」、「臓器移植法に伴う脳死認定」など、医療関連の問題を選ぶ生徒が増えてきました。そして、取材で何人もの医師に話を聞く中で、その生き方、仕事ぶりに触れて、自分も医療の世界をめざしたいと考える生徒が大幅に増えてきたのです。そうした生徒の意識の芽生えを、私たち教員も応援したいと考えました。そこで、医療の問題について、教員と生徒が一緒に勉強する場を作ろうということで、2004年度にスタートさせたのが「医学部小論文・面接講座」です。

――対象となる生徒と、講座の期間を教えてください。

石塚　特に選抜は実施しておらず、医学部を志望する生徒なら誰でも受講できます。高校2年次の3学期から3年次の3学期まで続く講座で、週1回、土曜日の午後に80分間の授業を、2年次3学期は4～5回、3年次1学期7～8回、夏休み8～10回、2学期8回実施しています。3年次3学期は模擬面接を行っています。

――具体的にはどのような内容の講座になっているのですか。

林　2年次3学期は、社会科と国語科の2名の教員が担当して、自分はなぜ医師をめざすのか、自分が理想とする医師像とはどのようなものなのか、もう一度見つめ直してもらいます。多くの生徒に医師志望の動機を問うと、「小さい頃に出会った医師にあこがれた」といった、志望のきっかけは答えることができます。しかし、その経験が、なぜ職業としての医師の選択に至ったのか、踏み込んで質問すると口ごもってしまうのです。志望動機や理想の医師像をしっかり考え、明確な文章にまとめることが、確固たる目的意識を持って医学部受験に向かう上で重要になると考えています。

石塚　3年次からは、社会科2名、理科1名、国語科2名、計5名の教員が担当して、さまざまな医療問題を取り上げます。近年の医学部入試の小論文、面接の内容を分析した上で、1学期は「医師・患者関係論」、夏休みは「地域医療」、2学期は「先端医療」といった具合に、入試でよく問われるテーマを設定しています。最初の数回の授業では、社会科、理科の教員が中心になって、各テーマについて、背景から実態、将来展望まで体系的に講義します。たとえば、「地域医療」の問題では、長野県の佐久総合病院の先駆的な取り組みを紹介しながら、超高齢社会における予防医療や看取りの医療の重要性などを社会科教員が講義します。「先端医療」のテーマでは、理科教員が生物の授業で学んだことと関連づけながら、iPS細胞を活用した創薬および再生医療の可能性、遺伝子診断の方法や是非などを講義します。3～4回目以降の授業では、小論文の課題文を示して、課題文の内容に関して深く学ぶほか、生徒同士でディスカッションも行います。時にはOBの研修医をゲストに招いて、議論に参加してもらうこともあり、現場の体験を踏まえた意見が生徒にはいい刺激になっています。そうしたディスカッションを通して、自分とは異なる考え方があることを知り、共有した上で、生徒は自分なりの視点で小論文を執筆していきます。

海城中学・高等学校
林 敬先生

教員が「書き換え案」を提示 具体的な改善点と工夫が分かる

林　各学期後半の授業では、国語科教員が、生徒の書いた小論文に対する指導を実施します。単に添削を行うだけでなく、数名の生徒の小論文を素材として、書き換え案を提示したプリントを配布し、どのように推敲すればより論理的かつ独創的な小論文になるのかを全員で考えていくところが大きな特色です。単なる模範解答ではなく、生徒の表現・内容を踏まえて書き換え案を示さなければならないわけで、国語科教員にとっては手間のかかる作業なのですが、生徒にとって改善点や創意工夫が具体的に見えるメリットは大きいと思います。

――3学期の模擬面接はどのような形で行われるのですか。

石塚　模擬面接は、多くの医学部入試の面接と同様に3名の教員が10～20分実施し、40分かけて面接の振り返りを行います。面接時の生徒の応答はビデオ撮影し、生徒と一緒にビデオを見ながら所作や言葉遣いなどの改善に役立てています。最初の頃は自分の考えをうまく伝えられない生徒が多いのですが、この模擬面接を繰り返すことで、次第に上達していきます。かなり厳しい面接内容になっており、医学部に合格した卒業生からは「ハードな模擬面接を経験していたから、本番入試は自信を持って臨むことができた」という声が聞かれます。

職業に直結する学部だけに明確な志望動機が重要になる

――この講座でとくに重視されていることはありますか。

林　近年、医療を取り巻く世界はめまぐるしく変化しています。たとえば、2004年に臨床研修制度が施行されたことに伴って、研修医は必ずしも出身大学の附属病院で研修する必要がなくなりました。その結果、大学病院の医師が不足し、地方に派遣していた医師を呼び戻しており、それが地方の医師不足を招いています。当然、医師が不足した病院では激務になり、医師の過労死問題も発生しています。生徒の中には「医師は社会的地位が高く、高収入で、景気に左右されない安定した職業」というイメージをもつ者もいます。しかし、実際にはそうした厳しい職場でもありますので、それを十分に理解した上で、それでも医師をめざすという覚悟、決意を持ってほしいと考えています。

――医師のリアルな実像も伝える講座になっているわけですね。

林　ええ。医学部は将来の職業に直結する学部です。それだけに事前の理解と決意が求められるのです。

石塚　それから、熾烈な医学部入試では、学科試験で好成績を収めることが大前提になります。ですから、この講座が学科試験対策の学習を阻害するようでは困ります。この講座の時間だけは医療、医学の問題を集中的に考え、小論文の作成も時間を限定して取り組むことで、学習にメリハリをつけるように指導しています。ほとんどの生徒たちが、「週1回、医療の問題に触れることは、志望動機の再確認の場にもなり、日頃の学科試験対策の勉強に対するモチベーションを高める相乗効果を生んでいる」と語っており、この講座が有意義な場になっていると感じています。

海城中学・高等学校
石塚 泰啓先生

School Information

- ●入試要項
- 試験日・科目
- 一般入試(1)　平成25年2月1日(金)
- 一般入試(2)　平成25年2月3日(日)
- 科目：国語・算数・社会・理科
- ● 所在地　〒169-0072 東京都新宿区大久保3-6-1
- ● 電　話　03-3209-5880
- ● 校　長　水谷弘
- ● 創　立　1891年
- ● URL　http://www.kaijo.ed.jp/
- ● アクセス　JR山手線「新大久保駅」より徒歩5分
  地下鉄副都心線「西早稲田駅」より徒歩8分
  JR中央線総武線「大久保駅」より徒歩10分
  西武新宿線・地下鉄東西線「高田馬場駅」より徒歩12分